様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２８２２

研究課題名（和文）古英語・中英語にみるラテン語動詞構文の英語統語法化

研究課題名（英文）Anglicising process of Latin verbal constructions in Old and Middle English

研究代表者
小倉　美知子（Ogura, Michiko）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：２０１２８６２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語の初期の段階において、ラテン語の文献が主体であったことから、その影響が英語統語法の中に見られるか否かを、古英語・中英語の文献を通じて探るものであった。古英語では形態的に失われた変化形を、助動詞等を用いての迂言用法によって補い、接続法の形態と共に迂言形を多く用いることによって独自の統語法を生み出し、それを中英語期に伝えていくことにより、元来持ってはいなかった中間態の機能を非人称構文と再帰構文に代行させて、中世を過ぎた近代英語の初期までも、その形態を持続させていた。ラテン語原典に必ずしも従わず、独自の統語法を発展させたことは、古英語後期から中英語初期の文献から例証できたと信ずる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古英語の研究が直接、現代の人々に役立つか、と思われるかもしれないが、やさしく書かれた英語史が間違った情報を与えているのが現実であるとき、実際は語史において何が起こっていたのかを知ることこそ重要である。この研究を行った者が、2013-2019年国際英語正教授学会の国際実行委員を務めて古英語のセッションを任されたこと、次の2022年の大会のアドバイザーを頼まれたことは、international に何らかの意義を持つのではないか。また、その研究がトロント大学の古英語辞書、オックスフォード辞典の一部にも引用されていることは、何らかの学術的意義を持つのではないか。

研究成果の概要（英文）：This study has tried to show how far the influence of Latin had gone into English syntax at the earlier stage of the language. It is true that Old English texts are mostly based on Latin translation, which makes researchers think that Old English syntax is highly influenced by Latin. Even in interlinear glosses, however, Anglo-Saxon scribes do not translate Latin faithfully but invent their own devices so as to explain the content to the very limited readers. Verses had their own style, while prose had to follow some regulations when rendering religious materials. It is inevitable to ignore Latin, but scribes made their tremendous efforts in interpreting the source language, using their language which had lost many morphological forms. What is necessary for modern readers is to read Old English not as a spoken tongue but as a written language formulated by Anglo-Saxon authors and scribes.

研究分野：中世英語学

キーワード：Old English　Middle English　Latin　glosses　syntax

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究を始めたきっかけは、古英語とラテン語原典とを見比べてその翻訳の正確さを問う研究者が多いことであった。しかしラテン語には英語にない文法形態が多く、それを英語訳すれば自ずと「正確」には訳せないことが分かる。従ってラテン語文法の立場から見るのではなく、古英語の時代の英語がどのような統語法を持っており、それがラテン語に類似していれば用いられ、相違していれば独自の統語法で補う工夫をしていた、と考えれば、「アングロサクソンにはラテン語が分からなかった」などという思い違いはなくなるであろうと、この調査に入ったのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、古英語文法がラテン語原典の構文をいかに取り入れ、発展させ、独自の構文として書き残し継続させて行ったかを例証することである。Ablative absolute を dative absolute に置き換えるような翻訳体は、分かり易いため従来の文法書でも扱われているが、英語になじまない構文・表現は、自ずと英語本来の構文に置き換えられていく。*Locutus est* は *sprecende is/wæs* とも書かれるが、*cwæð/sægde* の方がはるかに多い。Passive, perfective, hortative 等の形態が失われた英語は、何によってそれらのラテン形を現わしたか。古英語は元来持っていた接続法に加え、助動詞+動詞不定形という迂言用法を活用して、双方を文体的交替形として用いたのである。現在分詞・過去分詞がまだ進行・完了の時制に完全には組み込まれていない時、形容詞としての機能を発揮して be +現在分詞・過去分詞で単一動詞の交替形として用いられたのである。これらの迂言用法が、ラテン語の単一動詞の様々な形態が持つニュアンスを伝えるべく用いられた状況を、古英語文献を資料として拾い上げていき、文語標準語としての West Saxon 方言の多様性を示していくのが、本研究の目的であり、それはこの 3 年間でかなり成し遂げられたと信ずる。

３．研究の方法

研究方法は真に文献学的である。現在では web corpora にかなりの文献が収録されており、OED3 (Oxford English Dictionary, 3rd edition), DOEC (Dictionary of Old English Web Corpus), MED (Middle English Dictionary) から例文を収集することが可能である。当然すべてが収録されている訳ではないが、これらを用いないと言語理論を専門とする研究者には通じない場合がある（実際、彼らは文法 tag 付きの corpus を用いて、それを資料としているため、古英語の現代語訳に頼って解釈する傾向にある）。文献学の立場として、本研究で用いた資料のうち、特に聖書関係のものは、写本に戻って確認している。

(1) ラテン語との対応を見るには聖書が最も正確に近い資料である。本研究では特に Gospels, Heptateuch, Psalter Glosses を用いる。Homilies に関しては source が複数であると同時に重複・混在しているため、1 対 1 の対応を見るのは難しい。聖書以外では *Bede* が最も比較しやすく、*Cura Pastoralis, Orosius* 等は編集者の注に頼るしかない。DOEC を見れば、source がたどれるものは Latin が載せてあるので、それらを参照できる。しかしラテン語に戻れないからと言って、詩を資料から省くものではない。*Andreas, Guthlac, Judith, Juliana* のように散文の聖人伝との関連のある頭韻詩も、その定型句表現を参考にすることができる。写本年代は Ker (1957, 1990) に従うと共に、OED, MED の年代を参照する。初期中英語も含めるため、古英語の中に見られた表現が継続するかも確認できる。

(2) このように web corpus を使いながらも、先に述べたように編集者の注、glossary は重要な場合が多く、特に Bately, Godden, Roberts などの注は参照する必要がある。また Bosworth-Toller は web にもなっているが、紙媒体の辞書の方が見やすいと同時に、重要な例が多く載っているので、web corpora のみならず参照の必要がある。文法書では Mitchell (1985) に例が多い。Visser (1963-73) は珍しい例に気付かせてくれるが、古英語の形が追えない場合がある（古い edition に拠っている）ので、注意するべきである。資料としてはおよそ 9 世紀から 14 世紀までの資料をカヴァーしたつもりである。

４．研究成果

研究成果のまとめとしては、古英語はラテン語原典を訳し解説することにより、類似する syntax は取り入れ、自国語にない形態は迂言的表現等の工夫によって、伝統的な定型句と併せて、書きことばとしての表現を模索して行った課程を例証できたと思う。初期古英語では様々な実験的文例も見つかり、自由な表現が見られたが、Ælfric を中心とする後期古英語では文体の統一が見られ、そのすぐ後に形態的混同が続く。過渡期と初期中英語では、ラテン語から崩れた Anglo-Norman French と、北から進行してきた Old Norse との影響によって、South-West Midland を除いては新たな「英語」が台頭してくることになる。

(1)　2017 年度には発表 3、論文 5 編、2018 年度には著書 1 編、発表 3、論文 1 編、2019 年度には発表 5、論文 3 編によって、研究成果を公表した。2017 年 5 月には Stavanger, Norway での中英語学会で発表、7 月には私の主催する英語史学会（The Society of Historical English Language and

Linguistics）を Leeds の IMC(International Medieval Congress)の中で開催、11 月には Poznań, Poland の歴史英語学会(HEL-P)で発表。2018 年度には 5 月日本英文学会においてシンポジウムを企画、6 月近代英語協会においてシンポジウムに参加、7 月は国際英語正教授学会の前年の視察を兼ねて Poznań にて主催者達との打ち合わせ、8〜9 月は Edinburgh で国際歴史英語学会（ICEHL）に参加・発表、2019 年度は 7 月に IAUPE の本会と Medieval Symposium で司会・発表、8 月には London, Oxford, Cambridge で写本研究(特に聖書 MSS Auct.D.2.19, Bodley 441, Corpus Christi College Cambridge 140, Cotton Nero D.iv, Cotton Otho C.i. (vol. 1), Eng.B.b.C.2, Hatton 38, Royal I.A xiv)、9 月は Valladolid, Spain の学会 SELIM31 で発表、11 月は日本英語学会と Poznań の HEL-P で発表、12 月は日本中世英語英文学会で発表した。

(2)　3 年の研究期間で、初期古英語、後期古英語、初期中英語の中に見られるラテン語の動詞構文の英語化の現象を、かなり明らかにできたと思う。初期古英語、特に Cura Pastoralis では、規則に縛られない解説的な訳が見られ、後期古英語で「文法家」Ælfric が標準的古英語を作り上げ、過渡期から初期中英語で新たな段階が始まるところまで、発表・論文・著書を通して説明できたのではないかと思う。古英語期は識字率も低く、話しことばと書きことばの距離がかなり離れていたと推測できるが、文語標準語の成立後、Norman Conquest によって崩壊した標準語が、中英語の一方言の中に残りながら、新たな借入語と話しことばの影響により変化していくところは、2018 年の著書の中で示唆することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　7件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Michiko Ogura	４．巻 1
２．論文標題 Auxiliaries in Old English Interlinear Glosses	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Ihr werdet die Wahrheit erkennen Ye shall know the truth	６．最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Michiko Ogura	４．巻 81
２．論文標題 Old English Christian Terms in the Psalter Glosses: Mercian, Early West Saxon and West Saxon Glosses in Comparison	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京女子大学比較文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 73-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Michiko Ogura	４．巻 1
２．論文標題 Indirect Object or ex-Dative with or without _to_ in the Earlier and Later Versions of the Wycliffite Bible	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Current Explorations in Middle English	６．最初と最後の頁 193-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Michiko Ogura	４．巻 55
２．論文標題 How Free the Translation could be: Choices of Verb Forms in Lindisfarne and Rushworth Versions of the Gospels	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Aspects of Medieval Language and Literature	６．最初と最後の頁 179-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Michiko Ogura	4．巻 1
2．論文標題 What really happened to 'impersonal' and 'reflexive' constructions in Medieval English	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Essays and Studies in Middle English	6．最初と最後の頁 141-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Michiko Ogura	4．巻 1
2．論文標題 Binomials; Word Pairs and Variation as a Feature of Style in Old English Poetry	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Binomials in the History of English	6．最初と最後の頁 63-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Michiko Ogura	4．巻 87
2．論文標題 Pronoun Retention in Old and Middle English Relative Clauses	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Poetica	6．最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Michiko Ogura	4．巻 1
2．論文標題 Resumptive Pronouns in Old and Middle English Relative Clauses	5．発行年 2017年
3．雑誌名 English Without Boundaries: reading English from China to Canada	6．最初と最後の頁 180-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　8件）

１．発表者名 小倉美知子
２．発表標題 行間注釈内の助動詞
３．学会等名 日本中世英語英文学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Michiko Ogura
２．発表標題 Hunger or be hungry? -- Verb and 'be + adjective' as alternatives
３．学会等名 HEL-P 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小倉美知子
２．発表標題 Hunger (v.) か be hungry (be + adj.) か―通時的選択？
３．学会等名 日本英語学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Michiko Ogura
２．発表標題 Auxiliaries in Interlinear Glosses
３．学会等名 SELIM 31（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Michiko Ogura
２．発表標題 To die, to be dead, to be lifeless or unliving, and to be killed in Old and early Middle English
３．学会等名 IAUPE Main Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Michiko Ogura
２．発表標題 A negative element in the that-clause introduced by a verb of prohibition
３．学会等名 IAUPE Medieval Symposium（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小倉美知子
２．発表標題 詩編行間注釈書にみるキリスト教語彙の古英語訳
３．学会等名 日本英文学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 小倉美知子
２．発表標題 古英語文献における直接・間接話法
３．学会等名 近代英語協会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Michiko Ogura
２．発表標題 Verbs with negative import introducing affirmative or negative that-clause
３．学会等名 ICEHL 20（国際歴史英語学会20周年大会）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Michiko Ogura
２．発表標題 Indirect Object or ex-Dative with or without _to_ in the Earlier and Later versions of the Wycliffite Bible
３．学会等名 ICOME 10（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Michiko Ogura
２．発表標題 How Free the Translation could be: Choices of Verb Forms in Lindisfarne and Rushworth Versions of the Gospels
３．学会等名 Leeds International Medieval Congress（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Michiko Ogura
２．発表標題 Christian Terms in Interlinear Glosses of the Psalter: a lexical comparison between Vespasian, Regius and Lambeth Psalter
３．学会等名 The History of the English Language -- Poznan 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

1．著者名 Michiko Ogura	4．発行年 2018年
2．出版社 Peter Lang	5．総ページ数 vi + 100
3．書名 Periphrases in Medieval English	

1．著者名 Michiko Ogura and Hans Sauer (eds.)	4．発行年 2018年
2．出版社 Peter Lang	5．総ページ数 333
3．書名 Aspects of Medieval English Language and Literature	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考